

彫刻表現の空間と情景についての考察

—モノの「状態」から「情景、状況」への変遷—

虎尾 裕

本論考は、筆者が1983年にはじめて制作発表した個展での彫刻作品の表現から、およそ37年経過した2020年に制作発表した個展での表現に至る、彫刻のあり様がどのように変遷していったのかを、美術表現の時代背景と、文脈を探りながら考察するものである。本論考をまとめるに至った経緯と背景としては、日本国内の現代美術において、体系化された文脈の歴史がある一方、現代に至る多様化した現代アートの混沌とした状況、とりわけ近年において文脈の形骸化が際立つ中であって、美術の動向を改めて検証する必要があると思ったからである。

現代においては、ある種、彫刻は「形」という核心部分のあり様が、作者の表現行為の主題として捉えられる。三次元として立体物が、空間にどのように存在するかを表現することでもある。言い換えれば、空間と「もの」としての立体物が、どのように対峙し、空間に作用するのかでもある。

1. 現代美術の歴史的な文脈について
 - (1) 戦後1950～70年代を中心とする美術の動向
 - (2) 1980年代以降の美術の動向について
2. 現代彫刻表現の傾向と特徴
 - (1) 1980年代の立体表現の特徴
 - (2) 1990年代から現在までの立体表現の特徴
3. 筆者の1980年代以降、現在までの彫刻発表について
 - (1) 彫刻作品 1980年～2020年シリーズ作品の系譜
 - 1) 彫刻作品「棒」シリーズについて1983年～85年
 - 2) 彫刻作品「砦」シリーズについて1985年～88年

- 3) 彫刻作品「風」シリーズについて 1989 年～95 年
- 4) 彫刻作品「湿生林、群生林など」シリーズについて 1997 年～2003 年
- 5) 彫刻作品「山」シリーズについて 2009 年
- 6) 彫刻作品「稜線」シリーズについて 2010 年～14 年
 - a 「稜線」 2010 年～11 年
 - b 「円環を形づくる稜線」 2011 年～12 年
 - c 「連なる稜線」 2012 年～13 年
 - d 「山並み」 2014 年
 - e 「境界」 2014 年
- 7) 彫刻作品「針峰」シリーズについて 2015 年～17 年
- 8) 彫刻作品「峡谷」シリーズについて 2018 年～20 年

最後に、彫刻というジャンルにとっては、「形ある何か」ということは永遠のテーマでもあると思われる。一連の「何か」ということが、どんなモノとしての何か。この世に存在しないある種不思議な物体としての容姿、あるいは様子が、どのように人に感受されるものなのか、本考察の中でほんの少しだけその方向性が現れてきたように思う。

(宮城教育大学 教授)